

心理学 ミュージアム



高雄医学大学心理学系（台湾） 副教授
櫻井正二郎

Profile — さくらい しょうじろう
Institute of Information Science Academia Sinica (Taiwan) 助手を経て現職。高雄医学大学図書館館長，高雄医学大学コンピュータセンター長，高雄医学大学心理学系主任。専門は知覚心理学，両眼視，心理学史。著書は『視覚與認知』（共著，遠流出版社）など。

1945年以降の台湾における，古典実験心理学機器の運命

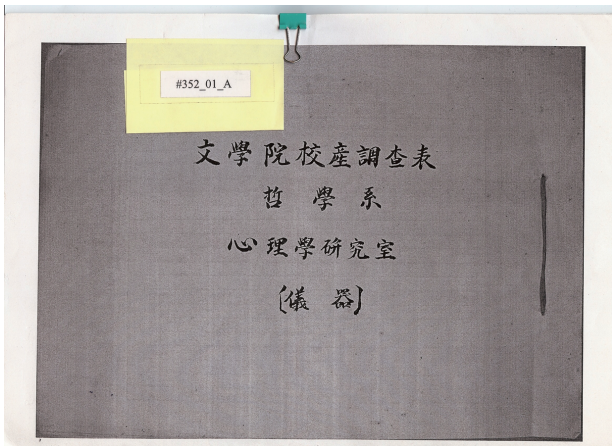


写真1 『文學院校産調査表』の表紙（台湾大学）



写真3 機器ディスプレイ用のコンピュータ



写真2 古典実験心理学機器を収めた専用棚

1945年8月15日の太平洋戦争終戦直前、台湾は対連合軍の最前線で、1945年5月31日には台北市が空襲に遭い、台北帝国大学も被害があったようです。心理学研究室の機器類は多数疎開され、また、台湾大学図書館に現存する戦後に調査された『文學院校産調査表 哲学系 心理學研究室〔儀器〕』（写真1）には二百数十点の機器が登録されています。台湾大学心理学系が哲学系から独立したのは1949年ですので、この調査表はそれ以前のものでわかります。台湾大学の校史年表によりますと、1945年9月に「台湾教育復員補導委員会」が設置され、台北帝国大学末代総長・安藤一雄と後の国立台湾大学初代校長（代理）・羅^ロ宗^{チヨウ}洛^ロが中心となって大学の正常を維持し、中華民国の政策に沿って効率良く日本の大学から中華民国の大学に変更され、学部は「院」となり、学科は「系」となりました。また、日本人教員は現地に貢献できる（農学、熱帯医学など）教授以外は順次日本に送還され、代わって大陸より有志を募り、各系を継続したようです。

台湾大学に心理学系ができるまで、心理学研究室の所在地は哲学系が使用し、研究室の機器類は西側の空き部屋に押し込められたとの記録が残っています。1945～1949年の中国大陸では、国民党政府は中国共産党との内戦状態にあり、台湾では台湾島内住民によるクーデター「228事件」が勃発し、それを制圧するため、大陸から新鋭の軍隊が多数投入されました。この時、住民側に2,000～28,000人の犠牲者が出ました（正確な人数は不明）。そして国民党政府は内戦に敗れ、大陸より完全撤退して台湾へ来ました。政府は共産党の台湾浸透を恐れ、1949年5月より台湾全島に戒厳令を発令し、1987年7月の解除まで、38年間の「白色テロ」と呼ばれる時期になりました。その間、日本語と日本植民時代については反国民的と考えられ、それを話すことも、研究することも弾圧されていました。また、日本色の強いものは、撤去されるか、破壊されるかでした。このような動乱の中で設立された心理学系は、当初教師4名と学生11名だったということです。教師の中で今回特別に紹介するのは、鄭^{フエン}發^{フツイ}育氏です。鄭氏は台南出身で、戦前に京都帝国大学で心理学の修士学位を取得。戦後、台湾に戻って哲学系講師となり、心理学系設立にも関わった人物です。鄭氏は帝国大学時代の研究の延長で台湾原住民の研究を続け、例えば力丸（1937）の追試をし、同じように、原住民の知能検査の結果は平均的に低い点数となることを確認しました（鄭、1952）。しかし結論は力丸と違い、知能検査の違いを部族間・民族間差異とせず、その児童が置かれた環境の差異に帰するものとなりました。

1959年に心理学系の新しい建物が竣工し、帝国大学時代の実験心理学機器も搬入されたようです。1982年に現在使用されている心理学系の三階建ての北館が完成して、古典実験心理学機器はその他新しく購入された機器とともに北館の地下室へ移されました。1990年には南館が増築され、古いものや使わないものなどを南館の地下室に移動しました。このように、戦前の機器類は少なくとも4回所蔵場所を変えられ、また1960年以降はアメリカの経済援助と台湾の経済発展により大学の予算も潤沢となり、新しい実験機器が多数導入され、戦前の古い機器類は場所をとるだけのものとなってしまったことは容易に想像できます。この間、写真1の調査表以外には、戦前の機器類を調査した形跡は見つかっていません。2005年、筆者が大山、西川両先生の依頼で撮影するまで、台湾大学心理学系としてもどのように扱っていか苦悩していた模様です。なにしろ大型で、見た目も貴重そうな機器ですが、いつ、どのような由来で、誰が購入したものかは、2005年時点では全然知られていなかったようです。また、使用の有無や使用法も把握されてなかったのが実情です。2005～2006年の調査結果から、戦後60年間に紛失、処分されたものが200点近くあることがわかりました。これは、戦後の台湾史、政治環境からすると仕方がないことで、むしろ全部廃棄せずに30点ほど残っていることには、機器の移動と保管に関わった方々の並々ならぬ努力と苦労が伝わります。

近年、台湾大学心理学系もこれら古典機器の重要性を認識して、2007年には南館の地下室と2階に写真2の専用棚を設けました。また、古典機器の教育への活用を考え、2012年からは南館エントランスに学科の歴史展示のコーナーを設け、写真3の機器ディスプレイ用のコンピュータと大型機器展示用スペースをデザインしています。展示コーナー全体は2013年10月までに完成予定で、大型機器を順次展覧する計画です。